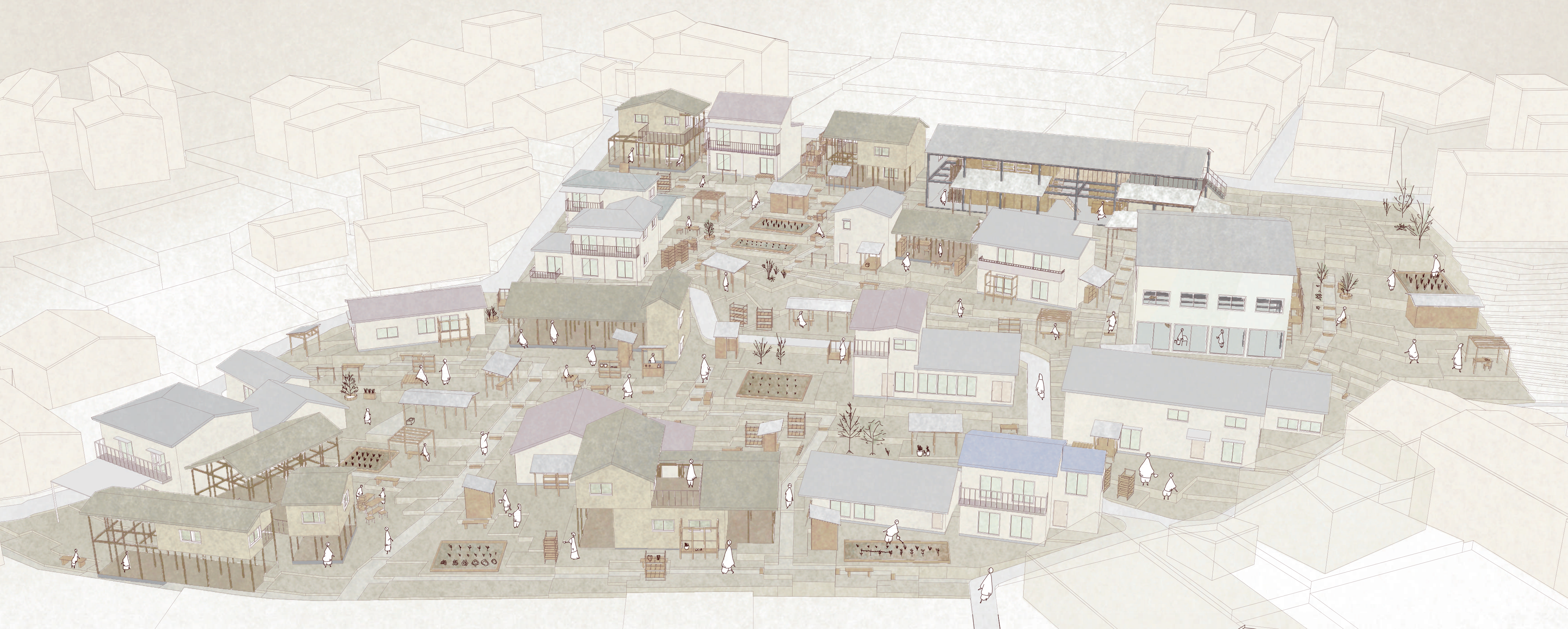
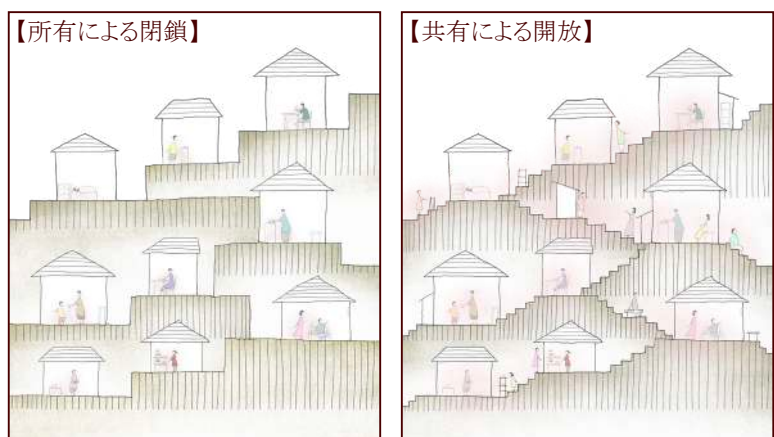


還る家、継ぐイエへ

ー所有から考える陶都瀬戸の共同体再編ー



1. 社会背景 所有がつくった分断された暮らし



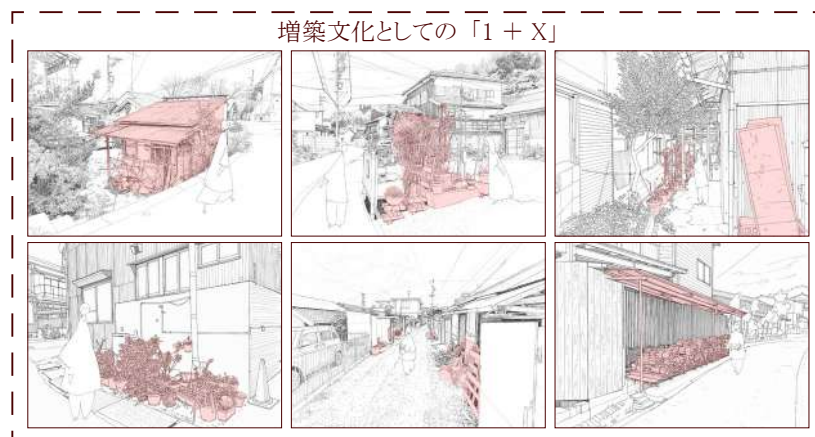
現代の地方都市では、所有を前提とした住宅が生活を分断し、地域や隣人との関係を希薄化させている。所有は自由や安定をもたらす一方で、人を孤立させ、支え合いを弱めてきた。家族単位の社会モデルが限界を迎えるいま、血縁や所有を超えて関係を重ねる新たな共同体が求められる。「所有」から「共有」へと価値観を転換する空間を生み出す必要がある。

2. 敷地 陶都 / 愛知県 瀬戸市 宮里町



私は二十年を過ごした瀬戸市からこの問いを考え始めた。瀬戸は千年続く陶磁器の街で、かつては土と火を介して労働と生活が結びつく「つくる共同体」の風景が広がっていた。しかし今、工房は閉ざされ、煙は消え、「つくること」と「暮らすこと」は分断された。この変化は産業衰退にとどまらず、現代社会における関係の喪失を象徴している。その矛盾が最も表れているのが宮里町である。陶土採掘場と中心市街地の間に位置し、かつては工房と住まいが混在していたが、現在は空き工房や空き家、空き地が目立つ。私自身も一つの物件の改修に関わり、所有者不明や管理不全といった課題に直面した。宮里町は、瀬戸の問題が凝縮された場所である。

3. 調査 「1 + X」の生活と路地の風景

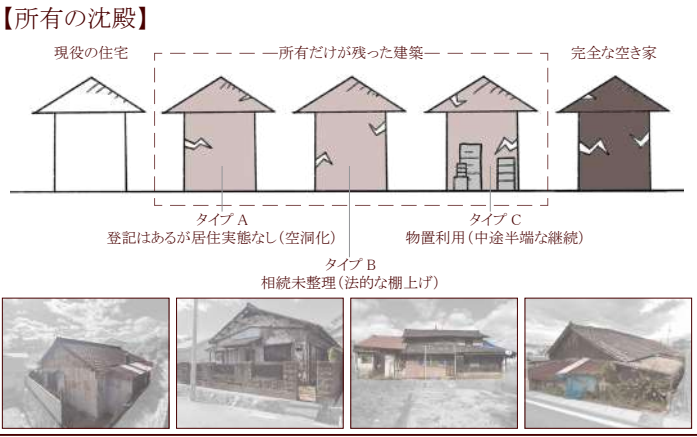


瀬戸には、生活に応じて小屋や屋根を継ぎ足す「1 + X」の住文化が残り、住戸と街の間に半屋外的な中間領域を生み出してきた。しかし共有の基盤が失われたいま、循環は滞り、空き家や未利用空間が増えている。路地の風景は、「つくる行為」と「使う行為」の反復によって形成されてきた。本計画では、その行為を分解し、空間の原理として捉え直している。



4. 課題 所有と建築の歪み

■ 4-1. 空き家かどうかすら分からない〈所有の曖昧化〉



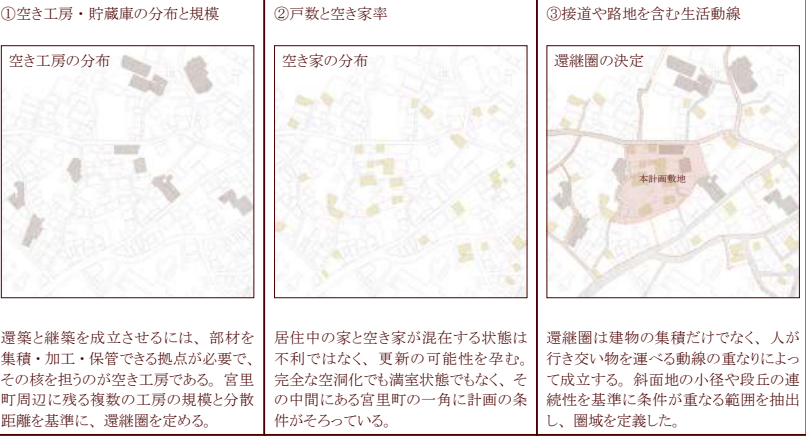
瀬戸市宮里町には、居住中でも完全な空き家でもないグレイゾーンの建物が多く残っている。所有者はいるものの十分に管理されず、修繕も解体も活用もされないまま取り残されている。これは、所有に半う責任や管理が空洞化し、「所有だけが残った建築」が地域に滞留している状態といえる。

6. 設計手法 時間としての建築

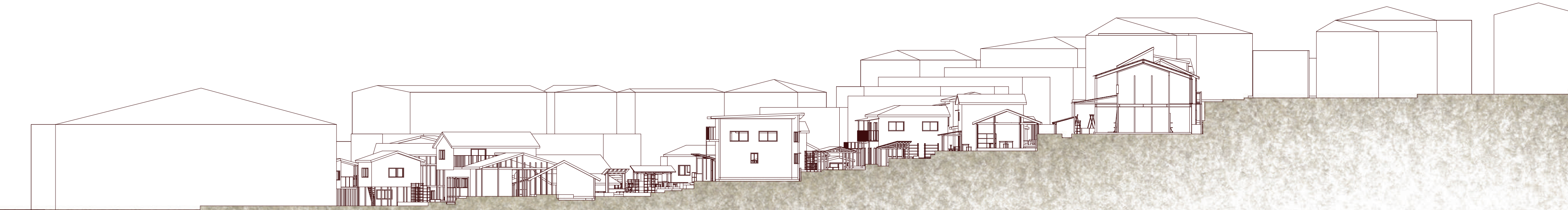
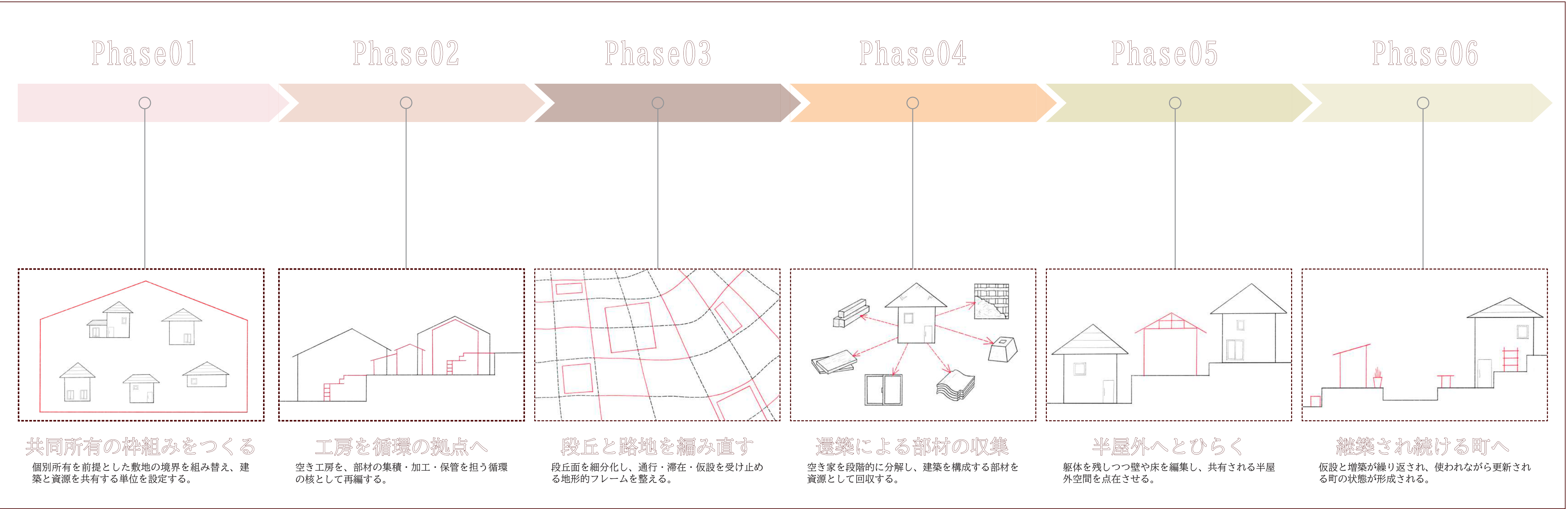
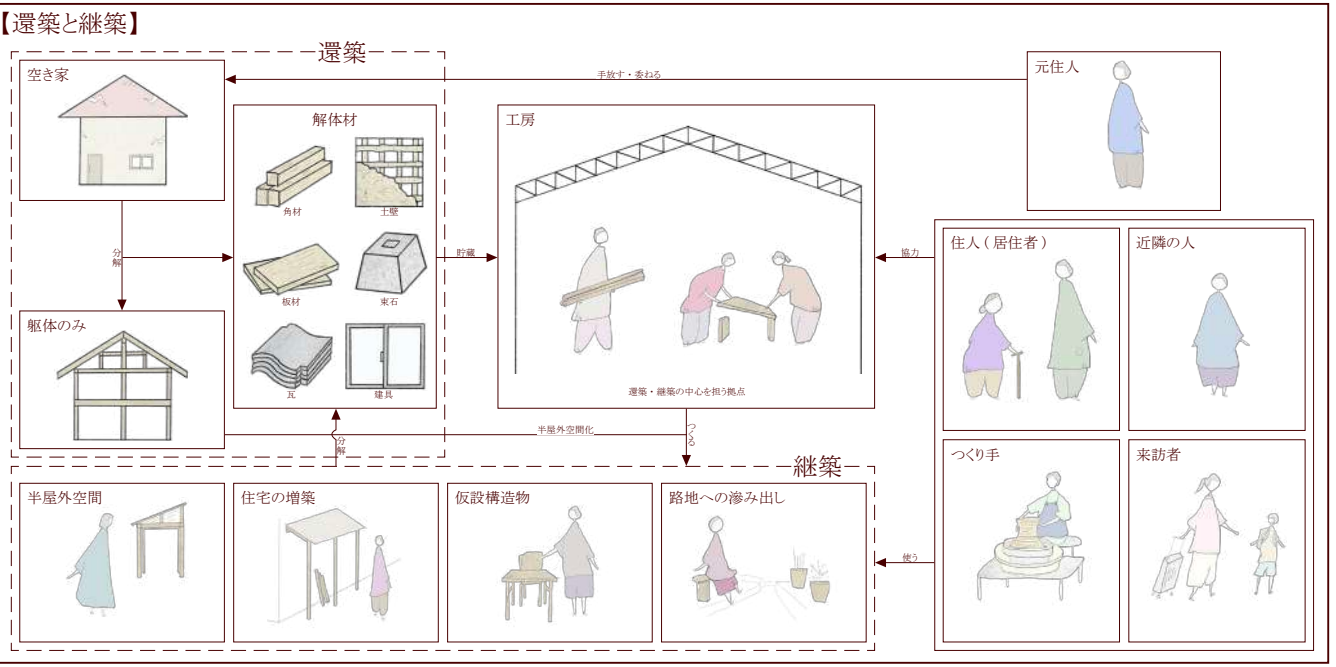
本計画は、建築を完成形として与えるのではなく、町が更新され続ける仕組みそのものを設計する試みである。停滞する宮里町において、空き家や暫定利用を衰退ではなく再編の契機として読み替える。建築単体ではなく、人・土地・空間の関係が時間の中で繰り返し組み替えられる過程を対象とし、還築と継築が循環し続ける条件を整える計画である。

5. 建築提案 地域の実態から立ち上がる建築の単位と原理

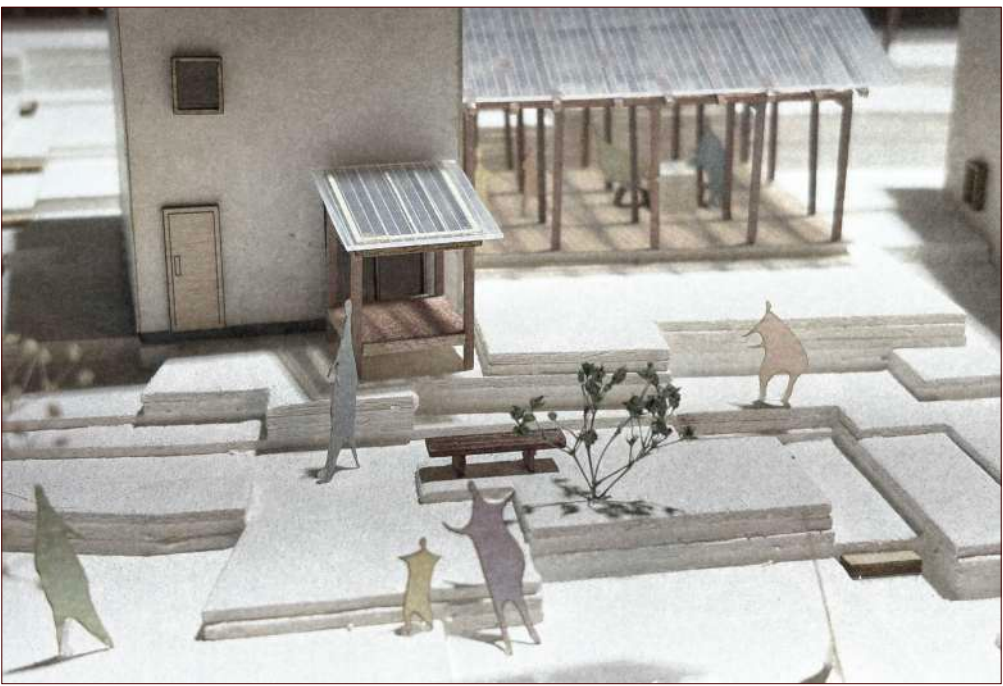
■還継圏という単位の決定



本計画は個別の建物再生ではなく、空き家や資材廃棄、関係の断絶という構造に応答するものである。敷地を所有ではなく循環の単位と捉え、その領域を「選環圏」と定義する。その圏域における原理として、二つの概念を導入する。「選環」は建物を部材へ選ち次へ渡すこと、「継染」はそれらを用い生活に広げて継ぎ足すこと。建築を完成形から更新し続ける存在へ転換する枠組みである。



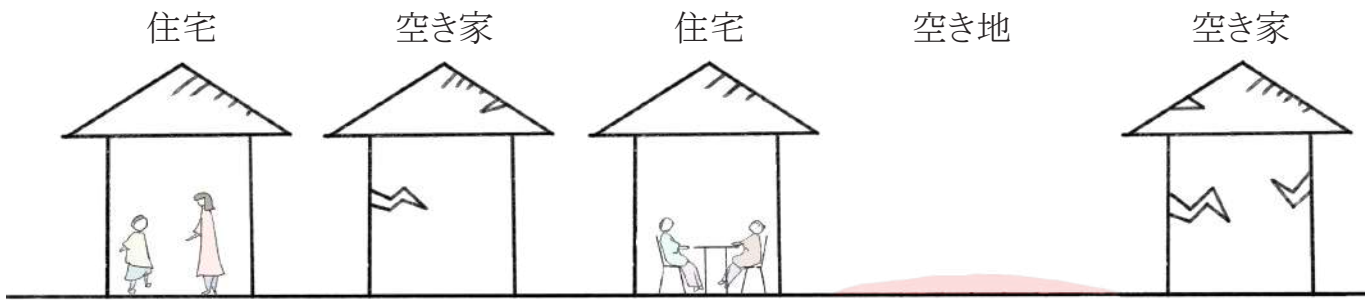
7. 計画提案



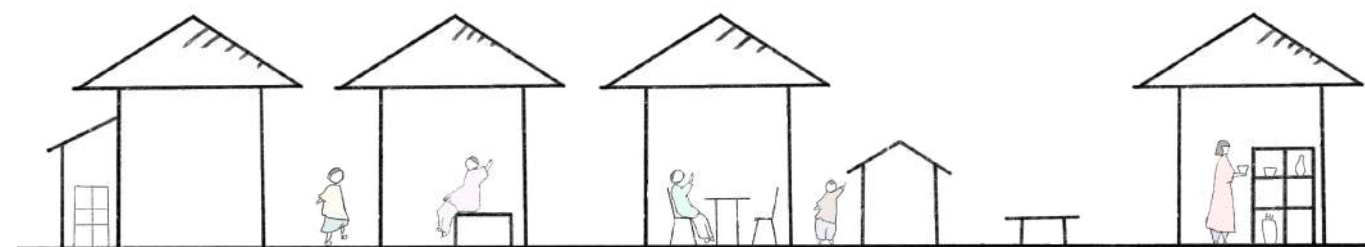
Phase01 共同所有の枠組み設定

本計画の根底にあるのは、「所有」を単なる権利ではなく、関係を編み直すためのフレームとして再定義することである。瀬戸市に堆積してきた空き家や空き工房の問題は、単に建物が老朽化したことに起因するのではない。むしろそれは、所有が形式的にのみ存続し、実質的な使用や管理の関係が消失したことによって生じている。建物は誰かのものであり続けているが、誰の生活とも結びついていない。その状態こそが、都市の停滞を生んでいる。本計画では、こうした宙吊り状態にある建物や土地を「共同所有」という枠組みによって再編する。共同所有とは、単に複数人が権利を持つことではなく、使うこと・直すこと・つくり変えることに関わる責任と自由を、選継圏の内部で共有する仕組みである。個人の排他的所有から、関係の中で開かれた所有へと価値を転換することで、建築は再び「使われながら変わるもの」として都市に戻される。建物は固定された資産ではなく、解体・再構成・増築・仮設といった操作を通じて、関係に応じて更新されていく「共有のストック」として扱われる。

共同所有の枠組み設定

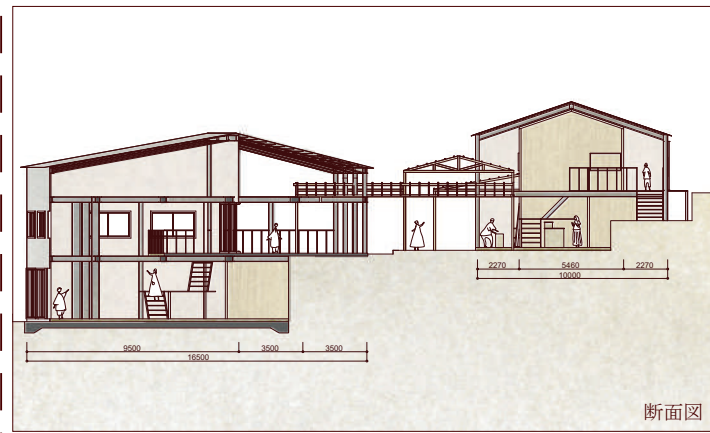
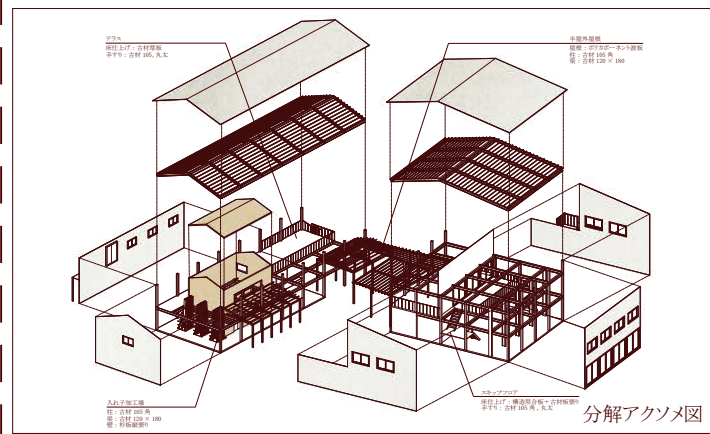


空間資源を共有ストックとして活用



Phase02 循環拠点としての工房再編

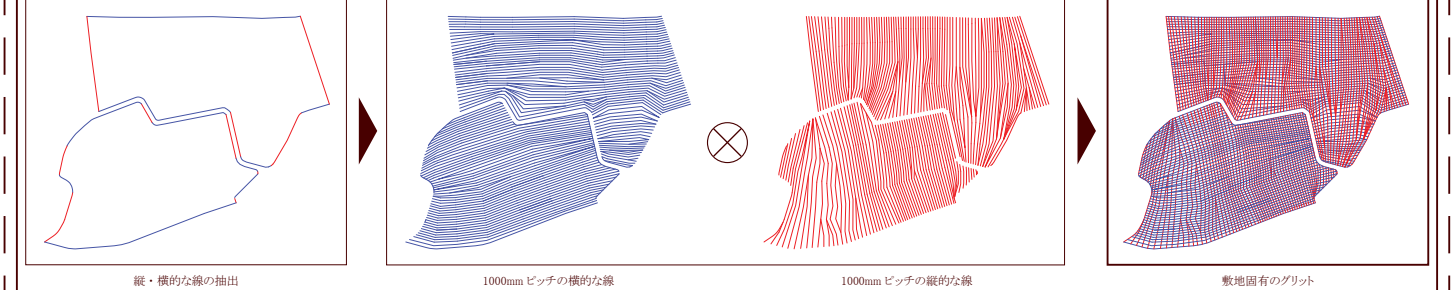
選継圏のネットワークの中心には、既存の二棟の工房を転用した「コウボウ」が置かれる。ここは単なる作業場ではなく、解体材が集積され、加工され、再び街へと配分されていく拠点である。瀬戸の陶業がかつてそうであったように、ここでは「つくる」行為が生活から切り離されるのではなく、日常の只中に置き直される。二棟の工房は、「つくる行為」と「使う行為」という異なる性格を持つ場として分節される。一方の棟は、木材加工や部材のストック、解体作業を担う半屋外化された工房であり、もう一方の棟は、スキップフロアや仮設的な構造物によって、より生活に近い「使われる」場として構成される。この二つは明確に分断されるのではなく、両者の間に設けられた半屋外の屋根空間によって、緩やかに連続していく。この半屋外の結節点は、選継圏内外の人々が集い、部材が行き交い、作業と生活が交差するコミュニティスペースとして機能する。そこでは、専門家としての職人と住人としての利用者の境界も曖昧になり、誰もが「つくる」ことに参加しうる場が生まれる。



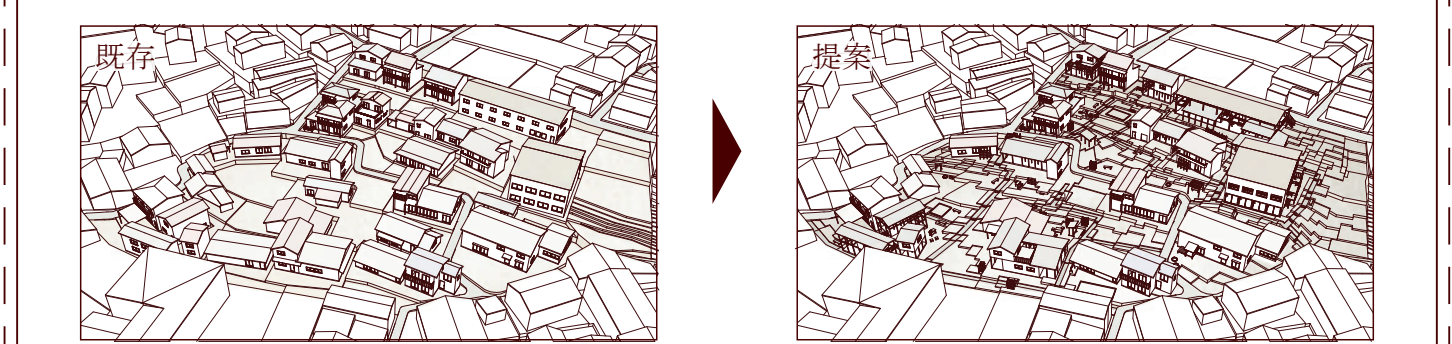
Phase03 段丘地形の細分化

本計画では、敷地に潜む輪郭や境界線を抽出し、歪みを包摂したローカルなグリッドを設定する。1000mmピッチのこの座標系は、選築材による仮設構造物と結びついた更新可能なフレームである。これを基盤に、身体スケールと既存条件を踏まえて段丘を形成し、主要動線はわずかに沈んだ帯として通す。地形そのものを行為と循環を支えるインフラとし、選築・継築が展開する基盤となる。

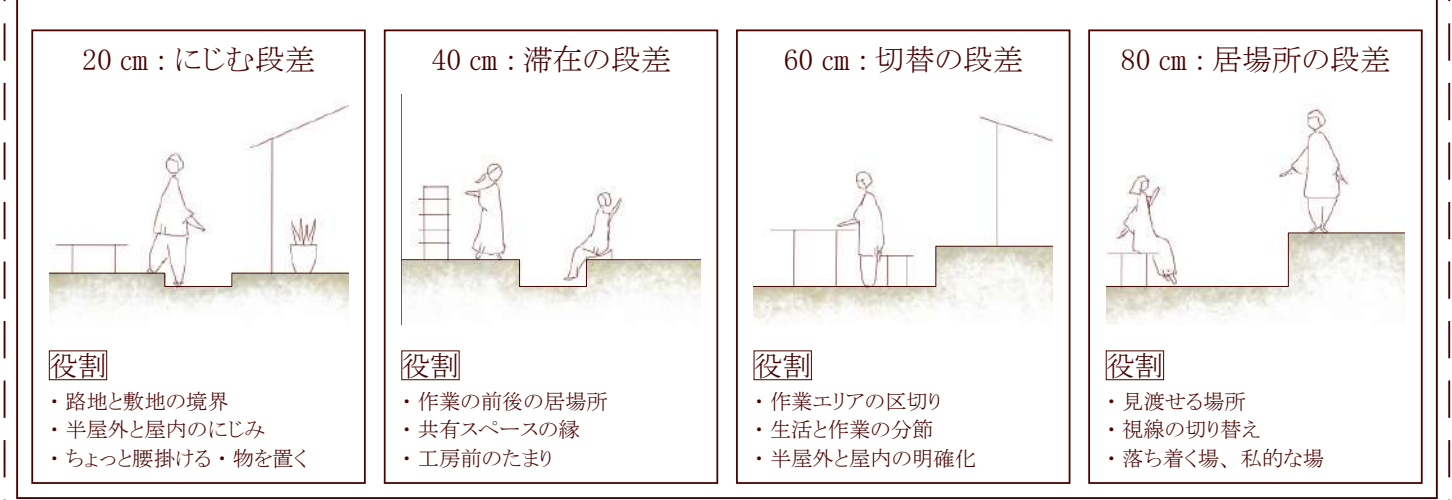
【グリッドの構成】



【段丘面の変化】



【段差による行為のグラデーション】

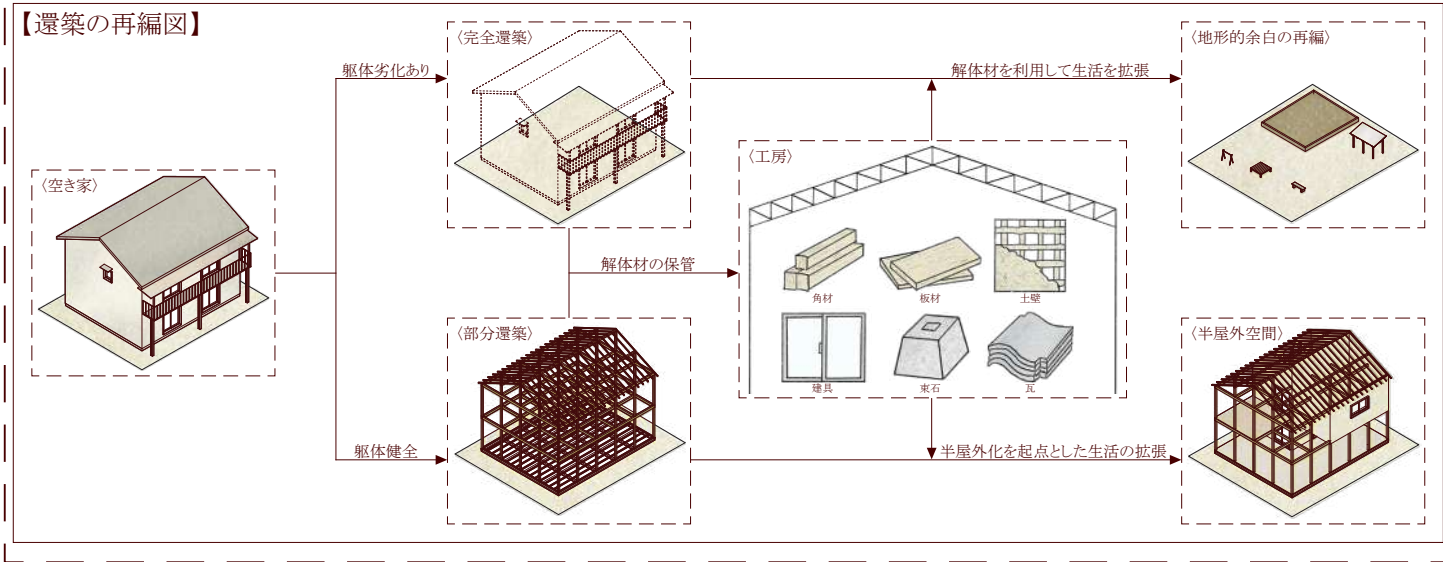


7. 計画提案



Phase04 還築期

このフェーズでは、選継圏内に点在する空き家を単なる撤去対象ではなく、「編集される構造体」として扱う。主に居住実態のない空き家を対象とし、一斉に解体するのではなく、建物の状態に応じて段階的に分解・再編していく。まず構造的健全性を調査し、柱・梁・基礎が著しく劣化した建物は躯体レベルまで分解し、空間を一度「還す」ことで、段丘や路地、仮設構造物を受け止める地形的余白へと転換する。一方、構造的に安定した建物は躯体を残し、壁・床・建具を取り外すことで半屋外化された共有空間として再編する。これにより、住宅でも空地でもない中間的な建築が街の中に点在する。分解の過程で生じる柱・梁・床板・瓦・建具などの多様な部材はコウボウへ集約され、選別・保管のうえ新たな建築素材として再利用される。陶業とともに蓄積されてきた良質な木材や建具は、地域の記憶を継ぐ資源として再び循環する。こうした還築は建物を消去する行為ではなく、空間の状態を段階的に編集しながら、新たな使われ方の可能性を街の中に埋め込んでいく操作である。

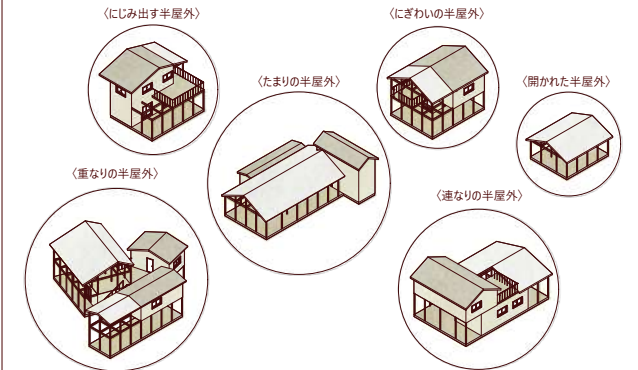


Phase05 半屋外共有領域の生成

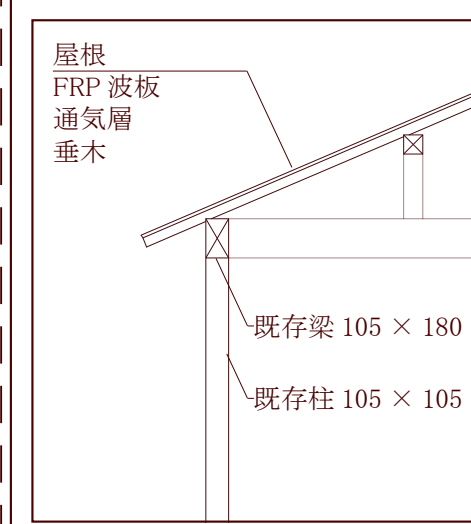
すべての空き家が還築されるわけではない。状態の良い建物や、立地的に重要な位置にあるものは、部分的に壁や床を取り除くことで半屋外化される。ここで生まれるのは、室内でも屋外でもない、中間的な空間である。この半屋外空間は、個人の所有でも完全な公共でもなく、選継圏の中で共有される領域として機能する。作業、食事、会話、展示、子どもの遊び、ちょっとした集まりなど、用途は固定されず、日常の行為に応じて使われ方が変化する。建築的に見ると、この操作は「壁を壊すこと」ではなく、「所有の境界を溶かすこと」である。閉じた住宅が半屋外化されることで、生活が路地や段丘へとしみ出し、人と人の距離が再編される。視線と音と気配が交錯することで、かつて瀬戸の路地にあった関係性が、現代のかたちで再び立ち上がる。このフェーズにより、地形・仮設物・住宅が結びつき、敷地全体が「共同で使われる生活の場」として再構成されていく。

【6つの半屋外空間】

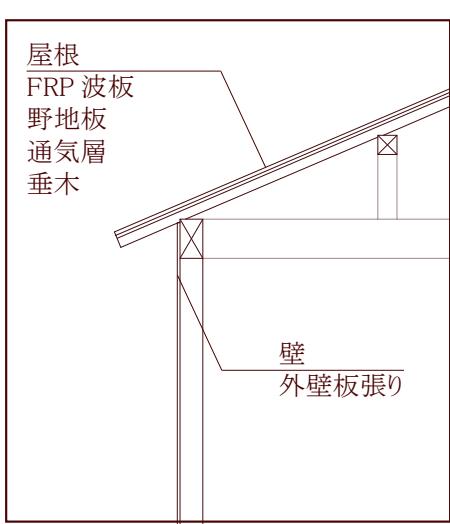
空間の性格は設計によって決まるのではなく、住人の選択により立ち上がる。ここに示す6つの半屋外空間も、その一時点の解にすぎない。



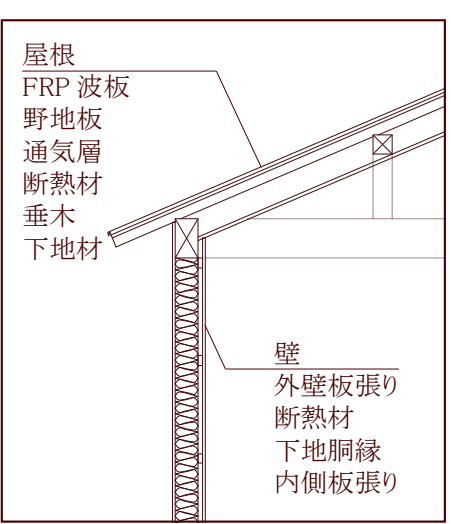
開放型



滞在型



居住型



重なり(半屋外)



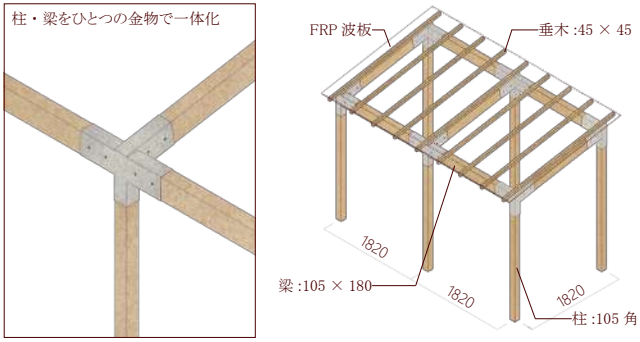
開かれた半屋外

Phase06 継築期

ここでは建築は完成されるものではなく、使われながら更新され続ける存在となる。棚、縁台、作業台、屋根、干し場、小屋、温室、簡易的な部屋—それらは専門家によって一括して設計されるのではなく、コウボウの部材と工具を使って、住人たちの手でつくられていく。必要になれば増やし、不要になれば外し、別の場所へ移す。建築は固定された形ではなく、生活のリズムに応じて変化する装置となる。段丘と路地という地形的フレームの上で、こうした仮設的構造物が増殖することで、街は少しずつ密度と関係性を回復していく。畑がで、作業が生まれ、滞留が起こり、助け合いが編まれていく。この状態こそが、本計画が目指す完成である。それは静止した完成形ではなく、還築と継築が繰り返され、人と資材が循環し続ける、生きている都市の姿である。

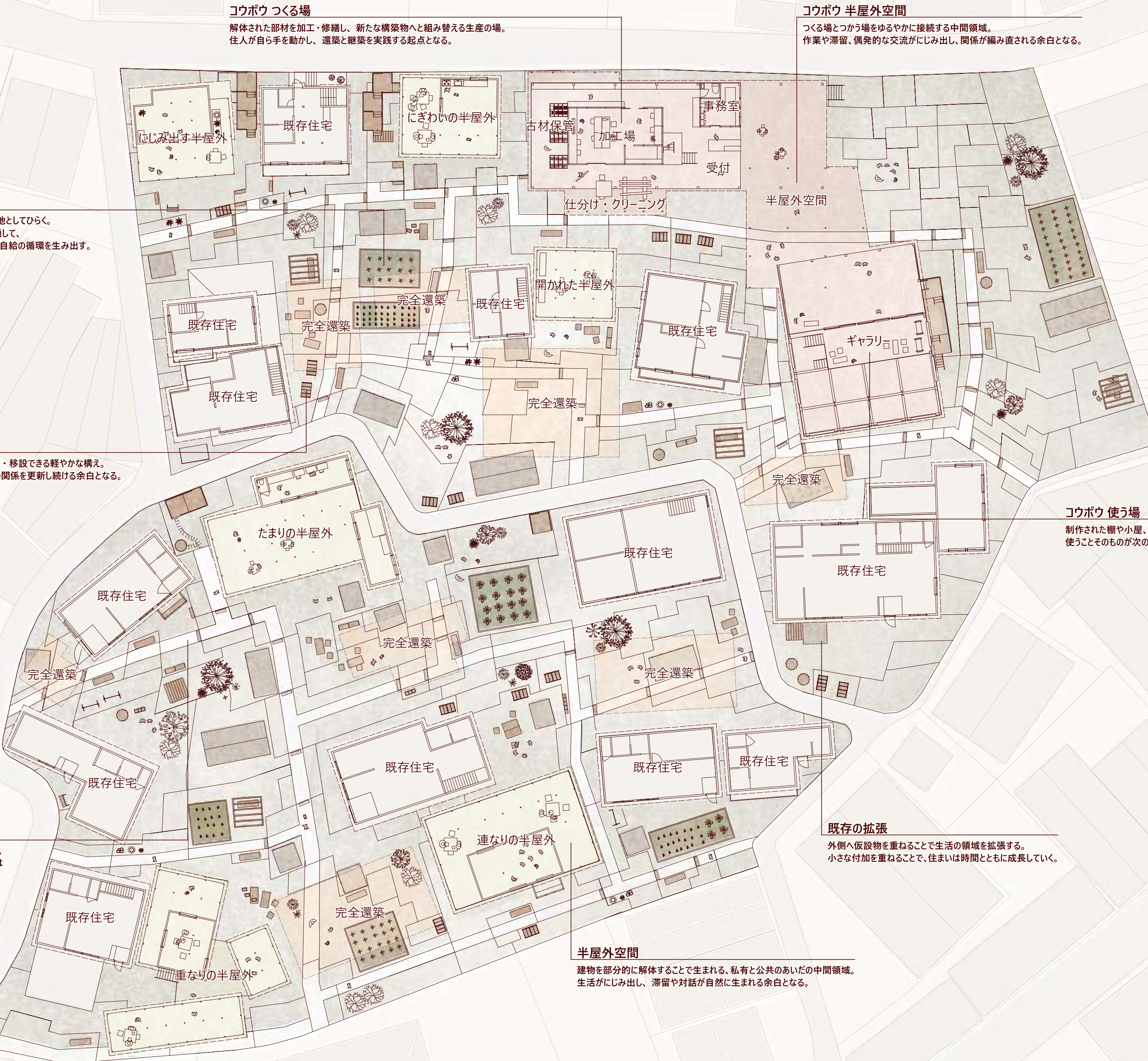
【金物による簡易フレーム構法】

柱（105角）と梁（105×180）を金物ではめ込むだけでフレームが立ち上がる。垂木を渡しFRP波板を張れば屋根が成立する。接合は金物とビス留めのみで構成され、住人が簡単に組み替え・増設できる構法としている。



【仮設構造物のカタログ】

片流れ屋根（半屋外） 利用部材：角材、柱、壁、屋根、瓦、土間 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める 生活行為：滞在する・集まる	片流れ屋根（屋内） 利用部材：角材、板材、瓦、垂木 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：滞在する・作業する・置く・貯める	切妻屋根（半屋外） 利用部材：角材、板材、垂木、野地板、瓦 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：集まる・作業する・通る	切妻屋根（屋内） 利用部材：角材、板材、瓦、垂木 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：滞在する・置く・貯める	可動縁台 利用部材：角材、板材、垂木、金物 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める 生活行為：作業する・見せる・集まる	バーゴラ 利用部材：角材、柱、瓦 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める 生活行為：滞在する・通る・集まる
やぐら 利用部材：角材、板材、金物 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める 生活行為：見せる・置く・貯める	仮設テラス 利用部材：角材、板材 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：滞在する・作業する・置く・貯める	張り出し屋根 利用部材：角材、板材、瓦、金物 構築行為：立てる・架ける・繋ぐ・留める 生活行為：通る・干す・貯める	壁付け屋根 利用部材：板材、角材、瓦、金物 構築行為：架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：通る・置く・貯める	壁付け格子棚 利用部材：角材、板材、垂木 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：作業する・置く・貯める	板棚 利用部材：板材、垂木 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：置く・貯める・見せる・通る
骨組み棚 利用部材：角材、板材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：置く・貯める・支える	作業台 利用部材：角材、板材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める・支える 生活行為：作業する	テーブル 利用部材：板材、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：作業する・置く・貯める	作業椅子 利用部材：板材、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：繋げる	椅子 利用部材：板材、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：繋げる・滞在する	ベンチ 利用部材：板材、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：繋げる・滞在する
瓦の腰掛け 利用部材：瓦 構築行為：架ける・繋ぐ 生活行為：繋げる	干し竿 利用部材：柱、丸太、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・立てる 生活行為：干す・貯める	看板 利用部材：板材、垂木、瓦 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：通る・干す・貯める	収納箱 利用部材：角材、板材、瓦、金物 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：通る・干す・貯める	木鉢 利用部材：板材、角材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：置く・貯める	仮設足場 利用部材：角材、板材 構築行為：架ける・繋ぐ・留める 生活行為：通る・作業する



コウボウ つくる場

解体された部材を加工・修繕し、新たな構築物へと組み替える生産の場。
住人が自ら手を動かし、還築と継業を実践する起点となる。

コウボウ 半屋外空間

つくる場とつかう場をゆるやかに接続する中間領域。
作業や滞留、偶発的な交流がにじみ出し、関係が編み直される余白となる。

農地

まとまりのある区画を共同の農地としてひらく。
耕し、育て、分け合う営みを通して、
所有を越えたゆるやかな連帯と自給の循環を生み出す。

仮設物

棚や小屋など、住人が容易に増減・移設できる軽やかな構え。
固定されない構築物が、人と空間の関係を更新し続ける余白となる。

コウボウ 使う場

制作された棚や小屋、家具を実際に用いながら試し、更新していく生活の場。
使うことそのものが次の改変を生み出す循環の一部となる。

段丘面の路地

段丘に沿う路地は、還継圏内をつなぐ生活の動線である。
仮設物や半屋外空間がにじみ出すことで、通るだけの場は
滞留や作業の場へと変わり、関係が編み直されていく。

既存の拡張

外側へ仮設物を重ねることで生活の領域を拡張する。
小さな付加を重ねることで、住まいは時間とともに成長していく。

半屋外空間

建物を部分的に解体することで生まれる、私有と公共のあいだの中間領域。
生活がにじみ出し、滞留や対話が自然に生まれる余白となる。

